
cry from U.

黒鷲やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c r y f r o m U .

【Nコード】

N 2 2 9 6 F

【作者名】

黒鷲やよい

【あらすじ】

少女が何の前触れもなく送り込まれたのは、モンスターハンター（モンハン）の世界。そこで出会った仲間との友情や恋、そしてモンスター達の異常。少女はどんな未来を選択し、どんな世界を望むのか。モンスターハンターの世界観を基調としたオリジナルストーリーですが、なるべくゲームをしたことのない方にも読みやすい様にしています。

prologue

体を覆う浮遊感。

おかしい。

けして開けられない瞼に、ピクリとも動かせない手足。

此处はどこ？

声も出せなければ、今どうしてこんなことになっているのかも分からない。

『面白そうだから、僕は君を選んであげるよ』

突如聞こえた声。それは“聞こえた”というよりは“響いた”という感覚に近く、私は頭痛に近いその幼い少年のような声に眉を寄せる。

そして、頭の中でその声に語りかけた。

『アンタ、誰？』

『教えてあげない』

ふふふ、と楽しげに笑う声。その声や態度から、やはり精神的な幼さを感じ取らずにはいられない。

『これから私はどうなるの？』

『それはなってみてからのお楽しみだよ、ウエルト』

そんな少年の声を最後に、意識がゆっくりと遠のいて行く。

“ウエルト”。

その名前には覚えがあった。でも、何故彼がその名を知っている

のか？

こうして、彼女の物語は始まった。

第1話 目覚め

それまでどれ程力を入れても開かなかった瞼が、何事もなかったかのようにパチリと開いた。でもあまりの眩しさに、すぐに閉じざるを得なくなる。

その代わり、目が光に慣れるまで他の感覚を研ぎ澄ませてみることにした。

まず飛び込んできたのは、近くで囀る小鳥の声。何匹も、しかも何種類もの鳥がいるようで、その鳴き声のレパートリーは幅広い。何匹かは私の近くを飛び回っているのか、鳴き声の合間に羽音が聞こえる。

次を感じたのは、私の下に敷かれている毛布の柔らかさ。それはどう考えても、私が安い家賃で借りている大学近くのアパートに敷いている毛布とは段違いのものだ。要は、ここは自宅ではないらしい。

「じゃあ、此処はどこなのさ？」

私は勢いよく上体を起す。ついでに瞼も。

なにせ此処が自宅ではないと分かった以上、のんびりなんかしていられない。また飲み会で飲みすぎて友人宅へ運ばれたのなら、今すぐその友人に謝らなければ。

だが目を開けて見回したそこは、私が想像した如何なる場所とも明らかに異なる場所だった。

「……なんだ、此処は？」

部屋に置かれた大きなベッドに大きなボックス。そしてベッド脇の窓から外を見やれば、遠くに聳え立つ雪山、そしてその手前に広がる活気溢れる村。

この光景、見たことがあるよ。

理性が、呆然と窓の外を見る私に働きかけた。そう、この光景。正しくは、“やったことがある”。

「まさか……」

その光景は、つい最近友人に勧められて始めたばかりのゲーム『モンスターハンター』にそっくりだった。

第2話 最初の出会い

「あ、起きた！気分はどうですかー？」

混乱状態の私に真っ先に手を貸してくれたのは、そう言って玄関をくぐってきた少女（と言っても外見はそれ程私と変わらないか、私よりも若干幼いくらいだ）だった。

「えーと…、私いまいち状況が分かってないんだけど」

「じゃあ、イロイロ説明するから、まずはコレ着てね」

そう少女が差し出したのは、見た目にも温かそうな毛皮の上着。そこで私は初めて、この部屋の気温が随分と低い、と気付いた。途端に鳥肌が立つ。

部屋の一角には囲炉裏とその上にヤカンが吊るされていて、それが暖房器具の役割を果たしてくれて部屋をある程度暖めてくれてはいる。がベッド脇の窓が開けられているので、肌寒いことに変わりはない。まあ、雪山の麓にある村なのだから当たり前なのかもしれないが。

「ありがとう」

「いいえー。あ、そう言えばあなたのお名前は何ですか？」

「私の名前は……、」

そこで一瞬だけ逡巡する。本名はある。だが此処ではそれ以上にしつくりくる名前がある、と直感で気付いた。

「私の名前はウェルト（welt）」

そう、これが『モンスターハンター』内で登録していた私の名前。ゲーム内では最初に自分のキャラクターを作る時、同時に自分の名前も自由に決められるのだ。理由は分からないにせよきつとコッチの世界に来てしまった以上、この名前を名乗った方が良さそうだと私は判断した。

ちなみにゲーム開始時に決められるものは名前の他にも幾つかある。性別・インナー・髪型と髪色・容姿・声である。性別は元々女であったから問題はない。だがそれ以外に関しては、どうやらゲームの選択は反映されていないようである。現に声は現実世界にいた時のままだし、容姿だって変わっていない。髪型や髪色も意識がなくなる前と全く変わっていないし（強いて言うなら寝癖が少しいているくらいだ）、着ている服に関しても私が普段着ていた物をそのままとっていた。

「貴女の名前は？」

「私はトウータ（tuta）と言います。このポック村で生活します。普段は集会所で、ハンターさんへお仕事の斡旋を行っています」

「…ポック村？ポック村じゃなくて？」

「ポツケ村は隣村です。隣って言うても、かなり歩かなきゃいけないですけどね。ちなみにこの雪山付近に存在する村は全て“ポツ”で始まるんですよ」

彼女の話では、どうやら雪山付近に存在する村は1つだけではなく、また雪山以外の場所にも幾つもの村が存在するらしい。

これはゲームとは大きくことなる設定だ。そもそも、ゲームではポツケ村という村から冒険が始まる。そして主人公は、ハンターとして村長や集会所から仕事を請ける。この仕事の種類も様々で、雪山や密林と言った場所に出向きその場特有のアイテム（例えばキノコ）を収集するような比較的安全な仕事から、強大なモンスターを退治もしくは罠を使用しての捕獲を行う命懸けの仕事まで多種多様。また仕事にはランクがあり、最初は簡単な仕事から、そして段々より難しくより危険な仕事へと進めるようなシステムをとっていた。だがしかし、トウータからもう少し詳しく話を聞いてみると、このポツケ村はつい最近出来た村ではあるが施設やハンターの存在という点でポツケ村に然程大差はなく、やはり既に1人、村専属のハンターがいるという。

「で、そのハンターさんがウイズリアさんが雪山で倒れてたのを連れて来てくれたんですよ」

「私が、雪山で…?」

「はいッ！最初はビックリしましたよー。絶対に仕事は失敗させない人が仕事放り出して、しかも薄着で今にも死に掛けそうな女の子抱えて帰ってきたんですから！」

トウータは右拳を握り締めて私に力説を振るってくれるが、残念

ながら私には雪山で行き倒れるような事をした覚えはない。

「というか、そもそも何故私が『モンハン』の世界に来てしまったのかさえ分からないのだ。それが何故雪山にいたのか、と聞かれても答えようがない。」

確かにゲーム内では、主人公は最初雪山でティガレックスという凶暴なモンスターに襲われて崖から落ちる。そして目が覚めるとそこはポッケ村で、以降ポッケ村の専属ハンターとして仕事つまりクエストをこなしていく、というストーリーだ。確かにその点で言えば、今の私はほぼ似た状態であると言える。ただし私がいるのはポッケ村ではなくポック村であり、私がハンターになれるかどうかも怪しいが。

「でも良かったです、一時期は本当に死にそうでした。ハンターさんもとっても心配なさってたんですよー？」

「へー」

トウータに相槌を打ってから、そう言えばそのハンターの名前を私は知らないのだということに（ようやく）思い至った。せめて名前くらいは知っておかないと、後で御礼が出来ない。

「ねえ、トウータ？」

「はい？」

「そのハンターの名前って、」

「なに？」そう続けようとした私の台詞は、タイミングよく部屋に侵入してきた1人の青年によって遮られた。逆光で残念ながらその人の顔が見えない。私は目つきが悪くなることを承知の上で、目

を細めた。

だが目つきを悪くすればする程、そのぼんやりと滲む面影にどこかしら見覚えのあるような気が出てくる。

「やっと目を覚ましたか、ウェル」

私はそれまで細めていた目を一気に見開いた。何故なら“ウェル”、彼がそう呼んだからだ。それは私が『モンハン』を始めたきっかけである大学の友人達から付けられた仇名。ウェルト（welt）、略してウェル（wel）。

だがその名を知っているのは極僅かなはず。

「アンタは…」

「覚えてないか？ダイ（dai）だよ」

その少年ダイは、そう言って八重歯を見せるように、見覚えのある悪戯小僧のような笑みで笑った。

第3話 これから

「ダイ……、つて大樹^{だいき}!？」

そこに立っていたのは間違いなく私の大学の友人であり、友人達の誰よりも早く私に『モンハン』を勧めてきた人物。

その当人自身も大の『モンハン』ファンであり、1日1クエ（つまり1日に1つのクエスト＝仕事をこなす事）は当たり前。酷い時は学校をサボってまで『モンハン』にのめり込み、次の日ニコニコ顔で私の前に現れては「ハンターランク上がった」などと報告してくるツワモノ。

「おいおい、ココでその名前呼ぶなよ……」

「あ、ごめん」

そう。私の師匠的存在の三坂大樹^{みさかだいき}、その人であった。

「あれー？ハンターさんとウェルトさんはお知り合いですか？」

「ああ、そうなんだ。トウータ、今までコイツの面倒ずっと見ててくれてありがとな。もう仕事戻っても良いぞ?」

「いえいえー。ハンターさんにはいつもモンスターを倒してもらったり、イロイロお世話になっていきますからねッ!じゃあ、トウータはギルドに帰るです。ハンターさん、あとは説明宜しくお願いしますね」

トウータはその容姿からは随分と幼く見える笑顔と「ウエルトさんにちゃんと説明してあげるんですよ?」という台詞を私と大樹に振りまき、そのままブンブンと手を振りながら家を去っていった。私はトウータが玄関を出たのを確認した後、ずっと気になっていたことを大樹に尋ねた。

「大樹: トウータって、何歳?」

「皆は“竜人族”って呼んでる。本人曰く、竜の守護を受けてる一族らしい。だから人間よりもずっと長命で、でも体はほぼ人間のままだ。だから外見年齢と精神年齢が一致しないんだそうだ」

「だからあんな幼い喋り方すんのね」

「嗚呼。そして体が成人に達した瞬間に成長が止まり、その後精神がそれに追いつき追い越す。後は死期が近づくまでずっとそのまま。だから“竜人族”の人達は、成人体形のまま数百年も生きることもあるそうだ」

「そう...」

2人でそんな話をしながら、トウータが視界から（しいては窓枠から）出ていくのを見送る。その走り方もやはり小学校低学年の女の子が走って行くようなものに似ていて、彼女自身自分が“竜人族

”なんて呼ばれているのをどう思っているのだろうか？と少しだけ気になった。

まあ、いずれ聞く機会もあるだろう。

そんなことよりも、だ。

私は未だに窓の外へとぼんやり視線を送っている大樹に、ここぞとばかりに詰め寄った。

「ちょっと、これってどういうこと？何で私達モンハンの世界に来ちゃってるわけ？って言うか、何でアンタはそんなにチャッカリシツカリこの世界に馴染んでんのよ！？」

「ちょ、ちょ、落ち着け！ちゃんと最初から説明すつからさ…」

私は未だこの釈然としない思いを（半ば八つ当たりだと自覚しつつも）大樹にブツけてやりたかったが、ここはおとなしく「説明してくれるなら…」と大樹に詰め寄るのを諦め、渋々勧められたベッド端に座る。そして私に向き合うように椅子を持ってきてそこに座った大樹の話をおとなしく聞くことにした。

大樹がこの世界にやって来たのは、この世界の時間軸で、私よりも数ヶ月前だそう。やはり雪山で死に掛けていたのを、近くの村のハンターがたまたま仕事をしている最中に見つけ、助けてくれたらしい。その際、現実世界（つまり私達が元いた世界）の持ち物は着ていた洋服以外一切なく、やはり何故この世界にいるのかは分からなかった。

その後その助けてくれたハンターを師匠と仰ぎ、狩りについて・モンスターについて・この世界についてを学び、この世界で生きていく術を身に着けた。勿論、最初はハンターとしてではなく村の手伝いをしながら生計を立てることを勧められたそう。だが大樹自身が武器を持ち、命懸けでモンスターを狩り、村を守る　そういう生き方を選択した。結果、最終的にはその師匠もそれで折れてくれたらしい。

そしてそれから暫く後、大樹はその師匠が引退するのをキツカケに独り立ちし、丁度その頃新興の村として噂になっていたこのポック村へ移り住んだ。新興の村にはやはりハンターは1人もおらず、そこでそこそこ訓練されていた大樹は大層重宝されたそう。

それからは、このポック村での生活に馴染みながら村長やギルドから与えられる仕事をこなす生計を立てていた。そしてある日雪山にモンスターを狩りに行ったところで行き倒れてた私を発見し、このポック村に運んだ、と。

「その時、何か変な様子とかなかった？異常気象が起こってたとか、近くに変なものが落ちてた、とか」

「俺も何でコッチの世界に来たのか気になってたから、その辺はくまなく調べた。でも特に何もなかったんだよな…」

「じゃあ、やっぱり何でコッチ来ちゃったのかは分からないのか」

「嗚呼…」

こちらの世界に来た理由や方法が分からなければ、現実世界に戻る方法が分かるはずもない。

私はガツクリと肩を落とした。『モンハン』の世界に来れたことが微塵も嬉しくないかと問われればそれは否定しなければならぬが、正直コッチは現実世界ほど甘い生活は望めない。基本的にハンターとして生きるならば、生きるために狩りをしなければならず、それをするには（自分で言うのも何だが）私はひ弱過ぎる。

現に、大樹　もといダイは、コチラで数ヶ月間鍛え上げていただけあつて現実世界にいた頃よりずっと遅くなっている。彼の背負っているものが身の丈程もある大剣であるというのもあるかもしれないが、それにしたってその変わり様はこの世界での将来を考える私を不安にさせた。

「ところでお前はとうすんの？」

「とうすんのつて？」

「これから。少なくとも帰る方法が分かるまではコッチで生きていかなきゃだろ？」

「まあ、そりゃね……」

「俺は師匠の勧めもあつて迷わずハンターの道選んだけど、お前は仮にも女だしな」

「仮にもつて何だ、仮にもつて！私はいっきとした女だッ！」

「お前のどこがれっきとした女だつて？」

「見て分かんのかッ！生物学上、正真正銘の女だッ」

「生物学上は、な。でも性格が完全に男だろ。その口調と言い、すぐ怒ること言い……」

「今怒つてるのは、お前のせいだ……！」

「はいはい……。ま、兎に角さ、絶対にハンターじゃなきゃいけないってことないんだ。幸いこの村は最近できたばかりだし、商店の手

伝いとかギルドの受付とか：事務側の人員も足りてないみたいだしな」

大樹の言葉に「それはそうなんだけど…」と唸る。

大樹に言われて思わず噛み付いたが、自分のことは自身でも“男っぽい”と自覚している。そもそも普通の可愛い女の子なら、血飛沫上げて倒れたモンスターの死体からアイテムを剥ぎ取るようなゲームを買って遊んだりはしないだろう。

そんな私がおとなく村に引きこもっていられるか？と聞かれたら、断言は出来ないがその答えはNOであろう。それにおそらくではあるが、狩りによる報酬の方が事務側の報酬より明らかに高い。それだけ危険度が高いという事だろうが、それでもこのままだと生活費の部分で私は大樹におんぶに抱っここの状態になってしう。それだけは絶対に嫌だった。

「またさ…、」

「ん？」

「また、私がハンターやりたいって言ったら、イロイロ教えてくれる？」

現実世界で私が『モンハン買った』と報告したその日から、大樹は事ある毎に私を援助してくれた。知識は勿論、明らかにランクの低い私の技術向上に付き合ってくれたり、どうしても倒せない敵を倒す援助（相手を怯ませるアイテムや罠を相手に的中させてくれる程度だがそれさえ出来ない私には相当助かった）をしてくれたり。

もし大樹がサポートしてくれるなら、私はやっていける気がする。

そんな思いを込めて投げかけた言葉に返ってきたのは、相変わらずの人懐っこい笑顔。

「もちろん！ビシバシ扱うから覚悟しとけよ？」

「……、ありがとう」

こうして、私のこの世界での本格的な生活が始まった。

第4話 得物決定

私とダイ（少なくともコチラの世界ではこの名前で呼び合うことになった）は、すぐに家を出て外に向かった。村の様々な施設を見ておきたいと言うのと、村の人々に挨拶をするためだ。これからこの村のハンターとして生きていく上で、村民の人達と友好関係を外すことは出来ない。

ダイが私を最初に案内してくれたのは、村の端にある彼が所有している農場だった。ゲーム内でもポツケ農場と呼ばれる農場を持っていたが、ここでもゲームの通り採掘や釣りなどで様々なアイテムが手に入られる。基本的に管理はアイルーという生き物が行ってくれている。

ちなみに“アイルー”とは。外見は猫そのものだが、彼等はかなりの知能と技術を持つ。基本的に人間の言語を解するし（語尾にニヤが付く）、時には二足歩行をしたり料理や戦闘の手伝いなどもしてくれる。そのため、そんな彼等の中には人間の仕事を手伝って生計を立てている者も多い。先程紹介した様に厨房での料理や戦闘での援助を始め、武器や防具の販売を手伝うアイルーや事務仕事を手伝ってくれるアイルーもいるらしい。ダイの農場で働くアイルー達もその一員だ。

ダイはポケーツと長閑な風景を見渡している私を他所に、農場中のアイルーを集めさせると私を紹介してくれた。

「今日から俺の仲間になるウェルト。これからこの農場も共有しようと思ってる。皆宜しくな？」

「ウエルトです。これから宜しくね」

「ダイのお友達ニヤ？」

「うん、そうだよ」

「もし暇な時は遊びに来ると良いニヤ。ココはのんびり出来て良いニヤー」

「うん、ありがとう」

農場のアイルー達は皆私に友好的で、最後には「ダイには秘密だニヤ」と言って綺麗な鉱石を1つ手渡してくれた。

どうやらこの村に女の子はまだ少ないらしく、アイルー達には例えハンターだと言えども村に女の子が増えることが嬉しかったらしい。

私はまだ名前も分からないその鉱石を、大事に懐にしまった。

次に連れて行かれたは武器屋。ゲームをしているだけでは分からなかったが、店先に立っただけで熱気が肌を刺激する。この熱気はどうやら店の奥で武器を製造・強化しているためらしい。今だけは毛皮の上着が暑かった。

「おい、エルジュ（elju）さん！」

「嗚呼、何だダイじゃないか。この前の武器はまだ……、って誰だいそのお嬢さん？」

「ほら、この前俺が雪山で拾ってきた」

「あ、あの娘かい！元氣になったんだね」

「あ、はい…。ありがとう御座います」

「この人はこの武器屋を経営してるエルジュさん。鍛冶の腕はピカイチだよ」

ダイがそう褒め称えるのは、明らかに“美女”という呼び名がピッタリのスラリとした女性だった。武器屋・鍛冶屋〃むさいオジサン、というイメージを根強く持っていた私には一見信じられない。

だがダイが褒めるからには相当な鍛冶師なのだろう。私は尊敬の念も込めてペコリと頭を下げた。

「これからこの村でハンターとしてお世話になるウエルトです」

「女の子ハンターかぁ。大変だよ？」

「分かってます」

「ふふ、そういう気概のある女は好きだよ。私はエルジュだ。武器や防具のことなら私に任せな」

「宜しく願います！」

エルジュさんはとても嬉しそうに「久々に女の子用の防具が作れるねえ」と腕を組む。そして私を上から下まで無遠慮に見回すと、

「防具のサイズ合わせがしたいから、明日にでもまたおいで。最高に可愛いものを作ってる！」

「や、可愛いのは、ちょっと…」

「良いじゃないの！女の子なんだから防具でもお洒落に！コレ私のポリシーだから」

「は、はあ…」と曖昧に頷くしかない私に、ダイがボソツと耳打ちした。

「諦めな。この村でエルジュさんに逆らえる人はいないから…」

「聞こえてるよ、ダイ！何ならアンタに頼まれてたあの防具、今からブリツブリの可愛らしいのに仕上げてやっても良いんだよ？」

「わっ、ちょ、それだけは勘弁！」

「じゃあ、はい。ごめんなさい、は？」

「……えっと……」

「じゃあ、ブリツブリ決て」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「まあ、今回はそれで許してやるとするか。ところで！ウエルトはどの武器でやってくつもりなんだい？」

「あ、ウエルで良いですよ！親しい人は皆そう呼ぶので」

「じゃあ、ウエルな。1番簡単な武器1つくらいなら明日までに作っておけるけど？」

この『モンハン』の世界には細かく分けると全部で11種類の武器が存在する。片手剣・大剣・太刀・双剣・ハンマー・狩猟笛・ランス・ガンランス・ライトボウガン・ヘビーボウガン・弓だ。それぞれに特徴があり、どれも一長一短。

勿論相手モンスターや仕事に合わせて幾つもの武器を使い分けられるのが理想だが、やはり相性というものがある。そしてその相性によっては、全く使い物にならないハンターになってしまう。それに往々にして最初に習得した武器が、その使用期間の長さに比例するように最も扱いやすい武器になることが多い。つまり、ここでの

私の選択はこれからのハンター生活を左右しかねない、非常に重要な意味を持っているのだ。

私はチラリ、と隣にいるダイを見やる。だが彼は「お前の好きなので良いと思うよ」と言うだけ。きっと私がもう何を選ぶか決めているのを、彼が分かつているからだろう。

私は少しだけ逡巡した後、やっぱりコレしかない！という決心と共にその武器の名前を口にした。

「笛で、お願いします」

笛、正式名称は狩猟笛。“笛”と名の付く通り、その武器は音を出して演奏することが出来る。そして幾つかの音を組み合わせる決まった旋律を奏することにより、自分や仲間のステータスを向上させることができる優れたものだ。しかも笛の先端は大体が大きく膨らんだ形をしており、その部分で敵を殴りつけることもできる。その威力は、近接武器で最大級と言われるハンマー並みだ。

しかしその分演奏中は必然的に無防備になってしまふし、何より笛が大きい（大抵身の丈よりも大きい）ため動きが遅くなる。これが何よりの欠点で、特に素早い敵に対峙した時が1番辛い。

やはり武器屋の店主と言うべきか、エルジュさんもその辺は弁えていたようだ。

「狩猟笛かあ、珍しいの使うんだね。扱いずらいだろう？」

「でもチームを援護できるし、それに動作が遅くても1発の威力が大きい方が好きなんです」

「はは、面白い娘だねえ。…良いだろう、明日までに1つ作っておくよ」

「ありがとうございます！」

エルジュさんは随分と私を気に入ってくれたようだ。「そろそろ行かなきゃなんだけど…」とブツブツ呟く（面と向かっては言えないらしい）ダイを余所に、私との雑談を続ける。

だが流石に話し過ぎたことに気付いたのか、暫くしてから「それじゃあ、また明日おいでね」と右目で器用にウイंकをして私達を送り出してくれた。

「ウエル…笛、楽しみか？」

「うん」

「良かったな」

ダイの言葉に自然と頬が緩むのを感じつつも、素直に頷く。私はもうすでに明日が楽しみでしょうがなくなっていた。

第5話 アイテム屋と集会所

次に私とダイが向かったのは、武器屋から少ししか離れていない位置に軒を構えるアイテム屋。ここではその名の通り、狩りに使う様々なアイテムが買える。

まだ新興の村とあって品揃えは宜しくないようだが、必要最低限のものは綺麗に管理されていた。おそらくとてもしっかりした店主なのだろう。その商品に対する扱いで好感が持てた。

「おや、ダイ君と……、これはこれは、この前のお嬢さんですね？
御加減は如何ですか？」

「もうすっかり良くなりました。ありがとうございます」

「この人はアイテム屋店主、兼学者のフェイル（fair）さん」

「こんにちは、以後お見知りおきを」

「私はウェルト、ウェルトって呼んで下さい。……それにしても、アイテム屋兼学者ってというのは？」

私の疑問に「ご尤もです」と、その細縁眼鏡を持ち上げながら微笑むフェイルさん。だが彼は店の奥から分厚い本を取り出すと、それを私に差し出した。

「これで信じていただけますかね？」

その本の表紙には『飛竜種の生態』という題と『フェイル・T』の名前。その表紙をめくって見れば、中にはビッシリと埋められた細かい文字と所々に見られる飛竜の写真。

残念ながら私はそれを読む気にはならなかったが、その本は明らかにフェイルさんが学者としてしっかりと活動をしていると証明していた。

「凄いですね…」

「元々は私もハンターで、より狩りを楽にするためにモンスターの生態や行動パターンを探っては纏めていたのです。が、それが高じて研究の域にまでなってしまうしてね」

「でもそれなら何故アイテム屋に？」

「ここの村長には昔とてもお世話になってまして。その恩返し、と言ったところでしょうか」

「村を見て回っているなら丁度良い。今日は村長もご在宅でしょうから、後で言ってみると良いですよ」フェイルさんは本を再び店の奥に見える本棚に仕舞うと、そう言って微笑んだ。

本当に柔腰な対応で、昔本当にハンターだったのか？と疑いたくなる程だ。まあ、いずれハンター時代の話なでも聞かせてもらおう。これからのハンター生活に何か役立つこともあるかもしれないし、ね。

そんなことを思いながら、だがとりあえず私とダイはフェイルさんにお礼を言うと、次の目的地を目指した。

次の目的地、それは村の入口近くにある集会所。ここではギルドからの仕事を請けることが出来る。また一角には酒場のような場所もあり、他のハンターや村の人々と一杯引つ掛けながら交流を楽しむこともできるのだ。

ダイからそんな説明を受けながらその真新しい木製の扉をくぐると、中を見渡すよりも先にトウータがパタパタと駆け寄ってきた。

「ウエルトさんにハンターさん！」

「よ、トウータ。仕事はどう？」

「今この村にハンターさんはハンターさん1人だけですから、お仕事は他のギルドとの連絡くらいですねー」

「そう言えばダイって、トウータに“ハンターさん”って呼ばれてるの？」

「はいッ！ハンターさんだから、ハンターさんって呼んでいます」

「でもな、トウータ。これからはウエルもハンターの仕事することになったんだ」

「ウエルトさんもハンターさんに？」

「そう。私もダイを手伝ってハンターのお仕事をする事になったの」

トウータはその新事実はどうやら困ってしまったらしい。顎に手を添えたまま「ハンターさんはハンターさんだからハンターさんなのであって、でもウエルトさんもハンターさんだからハンターさん……」などとブツブツ呟いている。どの“ハンターさん”がダイを指しているのかさえ謎だ。

そんな混乱気味のトウータに助け舟を出したのは、奥から現れた

私達より幾分上に見える女性だった。

「トウータ、それならこれからはハンターさんのことをダイさんと呼べば良いのよ」

「タルク（tark）お姉ちゃん！」

トウータに“お姉ちゃん”と呼ばれたその人は私とダイに笑顔で会釈すると、トウータの目線に合うように少しだけ背を屈めて（タルクさんの方がトウータより10cm弱くらい背が高い）、

「これからきつとこの村にもハンターさんはイッパイ来るわ。でも皆をハンターさんなんて呼んでいたらお仕事できなくなっちゃうでしょう？」

「うん」

「だからこれからはハンターさん達のことは皆名前で見えるの。良いわね？」

「はい！」

「それじゃあ、トウータはそのままお仕事に戻ってね」タルクさんの取り成しにトウータは機嫌良く返事をすると、そのまま集会所内のテーブルへと向かっていった。

クルリ、とタルクさんが私達の方に体を向ける。

「初めまして。自己紹介が遅れてしまってすみません。この集会所を取り仕切っているタルクと申します。以後宜しく願います」

「あ、ウェルトです！コチラこそ宜しくお願いします」

ダイがタルクさんの自己紹介に「トウータの親戚の姉さんなんだ。ちなみに俺らと同年」と付け足す。タルクさんは一連の流れから見てもかなりシッカリしているようで、とても同じくらいとは見えなかった。

「えつとー、失礼かもしれないんですけど…同年っていうのは実年齢が、ですか？それとも身体年齢が？」

「あ、私はトウータの親戚と言っても“竜人族”ではないですよ。本当に遠い遠い親戚で、他人も同然くらいなので」

「あ、そうなんですか…」

タルクさんの説明によると、どうやら“竜人族”と言うのはごく少数しか存在しないらしい。婚姻と血の繋がりに関係があるようで、タルクさんの一族は遠い昔に“竜人族”だったと言っただけで今はほとんどの人が普通の人間だそうだ。

むしろ現在まで“竜人族”の血が続いていること自体が奇跡のようなもので、その中でまだ幼少期であるトウータのような存在は見れること自体が神に出会うような確率だ、と。

「ダイ、村長なら自宅にいらっしゃるわ。挨拶してきたら？」

「ああ、フェイルさんからも聞いた。今から行ってくるよ」

「じゃあ、コッチから先に連絡いれとく」

「助かるよ」

私はダイとタルクさんの短い会話を待った後、にこやかに頭を下げる彼女とブンブンという効果音が聞こえてきそうな程勢いよく手を振るトウータに見送られて村長宅へと向かった。

第6話 若き村長

「村長の家はこの村の外れ、ちょっとした高台の上にあるんだ。だから行くのは不便だけど、眺めは最高だぞ」

私達は頭上を幾重にも重なった葉が覆う、暗くて足場の悪い細道を進んで行く。

スイスイ登って行くダイに懸命についていきながら、私は少ばかり息切れした声で「そうなの」と返すのが精一杯。一応大学ではテニスサークルに所属していたとは言え、最近ゲームばかりであまり運動しなかったのが悪かったようだ。体力の衰えを感じてしまう。そんな私に気付いてダイが「大丈夫か？」と声をかけてくれたが「これも高地トレーニングだと思えば」と強気で返す。だが「そこなくっちゃ！」と笑ったダイは更にスピードを上げる。全く、容赦のない師匠だ。

「おい、メルヴィス（melvis）！着いたぞー」

私がようやく細道を登りきり再び日の光の下に出た時には、ダイは既に誰かを探しているようだった。私はゆっくりと息を整えてから、改めてじっくりと周囲を観察した。

目の前にある木造の大きな家。おそらくこれが村長の家なのだろう。その大きさは、私が最初に寝かされていた家（確認はしていないがおそらくダイの家だ）とは比べ物にならない。それに造りもど

こか頑丈そうで、立派な家なのだと容易に想像がついた。

その木造の家の前には大きめの郵便ポスト。その中には溢れかえらんばかりの手紙が詰められている。その中には勿論村長宛の他愛ない手紙も含まれているのだろうが、きつとこれの中の幾つかが私達ハンターの仕事になる。つまり依頼書だ。

新興の村とも言えどもモンスターによる人々の被害は絶えない。それに加え、今は村専属のハンターがダイ1人なのだ。被害の大ききそうなものから片付けたとしても、やはり1人ではどうしても無理が出る。私は少しでのそんな人々の役に立てれば、と改めて心に誓った。

「やあ、ダイ。遅かったですね」

「言っただろ、連れがいるって。ほら！ウェル、コッチ来いよ」

私が周囲観察をしている内に、どうやらダイのお目当ての人が見つかったらしい。私は言われた通り、村長の家の玄関口でダイと親しげに話す青年の元へと向かった。

「コイツがその村の村長のメルヴィス。で、コッチが新しくこの村のハンターになるウェルトだ」

「村長のメルヴィスです。どうぞ宜しく」

「あ、ウェルトです。こちらこそこれから宜しくお願いします」

私がペコリと頭を下げると、「それじゃあ、こんなところで長話もなんですから」とメルヴィスさんが部屋の中へと私達を通してくれた。

家の中はメルヴィスさんの他に人気はなく、家政婦さんのような人も見当たらない。外見は私達とそう変わらないから独り身なのは納得できるとしても、だがしかし村長としての仕事をこなしながら家事もするとなると大変だろう。もしかしたら本当は奥さんがいて今は外に働きに出ているのかもしれない。

「いきなり、しかも女性にこんなことをお尋ねするのは大変恐縮なのですが、ウエルトさんはお幾つですか？」

「えっ！？や、ダイと同じ年ですよ？」

「やっぱりそうですか！いや、ダイのお友達だと聞いていたのできっとそうじゃないかと。私も実は同じ年なんです。ですからどうかダイのように、私にはいつも通りの話し方で喋っていただけませんか？」

「や、でも、メルヴィスさんは村長なわけですし……」

言いよんだ私の台詞を、すかさずダイが奪う。

「良いの良いの！コイツもその方が良いって言ってんだしさ、いつもみたいに気軽に話してやれよ」

「村民にそこまであっけらかんと肯定されてしまうと、村長的にはどうかと思わなくもないですが……。まあ、実際この村には同年代の人間があまりいないので、村長だとかそんなのは気にせず話していただけると嬉しいです」

「うーん、メルヴィスさんがそう言うなら……」

「ちなみに、メルで良いですよ？」

「それなら私もウエルで良い。それから、他人に頼むならまず自分から、だ」

開き直ってそう言ってやれば、「それはそうなのですが、この喋り方はすでに口癖と言つか何と言つか…まあ、とりあえず精進します」とメルは苦笑した。

「よし、自己紹介は済んだな。じゃあ少し込み入った話するか」

ダイがそう言ってテーブルの上に両肘をつく。私が「込み入った話って？」と聞けば、「あなた方異世界から来た方を含め、最近この世界全体で起こっている異変のことですよ」とメルが答えた。

第7話 異常と現状

正直私は驚いた。そして慌ててダイに確認する。

「メルって、私達が違う世界から来たとか知ってるわけ!？」

「ん、まあな」

「メルもそれを信じてるの!？」

「ええ、一応は。またイマイチ理解できない部分もあるけどね」

いやいや。普通異世界だトリップだなんて話、理解出来る出来ないじゃなくて、信じる信じないの次元でしょう！

しかしメルは本当にその話をしっかり信じているらしく、私の指摘など何でもないかのようにダイと話を続けた。

「他の村にも問い合わせた所、最近雪山だけでなく各地で人が行き倒れているのが発見されているようです。しかも、皆あなた方と同じ様な服を着ていた」

「つまり俺等と同じ、コッチの世界に送り込まれてる人間が他にもいるってことか」

「結構な数ですよ。雪山周辺の村だけでも、ここ数ヶ月でお2人を含め7人発見されています」

「そいつら皆何でコッチに来たのかは分かってないのか？」

「残り5人の内4人はまだ意識不明の重体のため確認はできませんが、その他1人については身に覚えがないと言っているそうです」

「やっぱりか…」

それまで私の話をまともに取り合ってくれない2人に些か憤然としながら話を流し聞きしていたのだが、今初めて聞かされた事実の背筋が凍った。

5人中4人が意識不明の重体？

まあ、考えれば納得はできる。あの凍える、どころではない寒さの雪山に意識を失った状態で放り出される。それだけで危険なのに、その上あそこにはモンスターがいるのだ。無意識という最高に無防備な状態で襲われたらひとたまりもない。

「…ちなみに、さ。その人達の名前分かる？ コッチの名前でも良いし、元いた世界での名前でも良いけど」

少しの希望と多大な不安を込めて、メルに尋ねる。彼はそんな私の心境を素早く察すると、その不安を緩和させるような穏やかな笑みで笑って、

「現実世界でのお仲間がいないか、心配なんですよね？ その辺は安心して下さい、ダイからお友達の名前を聞いて今は目下捜索中です。ちなみに、雪山で倒れていた人はソチラの世界での身分証明書みたいなものを持っていらいっしょだったのですが、確認してもらったところダイに教わった名前ではなかったそうです」

「そっか…」

未だ重体の人がいるので大っぴらに喜ぶことはしなかったが、でも身勝手だとは思いつつも私にとって最悪の状況でなかったことにとりあえず一安心した。それに、必ずしも他のモンハン仲間がコチラに飛ばされているとも限らない。

「今様々な地域の村に呼びかけて、対策チームを組もうという方向に持っていてます。今のところはそのような動きは見られませんが、このままモンスターが行き倒れた人を襲うようになったら、その内村にまで襲って来かねません」

「それに救助体制や情報交換システムとかも早急に整えたいしな」

「ええ。近日中に密林近くの村長で私の友人でもある人から、チームリーダーに相応しい人物をコチラに派遣してくれるとの知らせがきました」

「チームリーダーに相応しい人？」

それまで全く口を挟めなかった私だが、そこでようやく口を開く。それに答えてくれたのは、メル。

「はい。詳しいことはあまり聞いていないのですが、何でもダイヨリも前にコチラの世界に飛ばされてきた人物らしく、腕も相当良いようです」

「そんな人、村から離れさせて大丈夫なのか？」

「最初は友人も渋っていたようなのですが、その方の強い希望でこのチームに参加させることにしたようです」

「そんな凄い人なのか…。それじゃあ、心強いね」

「そうですね。到着する少し前に連絡下さるそうですから、そしてらその方を迎えに行っていただけですか？出来れば厚くもてなした

「いので」

「うん、勿論！」

意気込んでそう答えると、メルが「ありがとう御座います」と微笑む。私は現実世界では弟兄兄弟ばかりだったので、まるで優しい兄に褒められたような気分になって少しだけ恥ずかしくなった。同年とは言えこの落ち着いた物腰や丁寧な優しさに、つくづく癒し系だと感じる。

だが隣に座っていたダイにすかさず「何照れてんだよ」と頭を小突かれた。「何でもないッ！」と噛み付くが、未だダイは怪しそうに私をジロジロと見ていた。

第8話 行き先不安

私とダイは、それから暫し後にメルの家を出た。眼下に広がる村はもうオレンジ色の光で包まれている。眼前に聳える雪山はもう重い闇に包まれているようで、間もない夜の訪れを教えてくれていた。

「あ。そう言や、1番大事なこと言い忘れてた」

「なに？」

鬱蒼と木々の茂った細道を下り終えたところで、ダイが私を振り向いた。

「お前、これから俺ん家^ちで生活すんだからな」

「……、は？」

自分でも、随分間拔けな声を出してしまったと自覚している。正直口を半開きで固まったその顔は可愛くも何ともない、というのだってちゃんと分かっている。でも、もしかし、だ。

ダイはそんな私の思考を知ってか知らずか（おそらく後者だ）、
「部屋も丁度余ったところだったし、アイルー達も随分と世話好きだから人が増えて喜ぶだろうさ、あはははは」などと暢気に笑ってみせる。

まあ状況は理解出来なくもない。このポック村は新興の村。まだ

土地は余っているとさえも、これから増えるであろうハンターや村人のためにできるだけ土地を空けておきたい。丁度私とダイは友人同士な訳だし、しかもこれから同じチームとして行動する上で同じ家で生活した方が便利なこともイロイロと多い。

状況も理由も、理解は出来る。だが、理解することと納得することはまた別物だ。

「痛、つていててててててッ……!!」

「嗚呼、今日の夕飯は何だろうね？ダイ？」

私はダイの頬を思いっきり掴み上げると、そのまま満面の笑みと共に勢いよく歩き出す。後ろから何やら盛大な抗議の声が聞こえるが、そんなの気にしない。デリカシーのないダイへのささやかな報復だ。これでもまだ軽い方だと思って欲しいくらいだね。

「なんだ、ダイ？何かウエルを怒らせるようなことでもしたのかい？」

丁度武具屋の前を通りかかったところで、たまたま店先に出ていたエルジュさんがまるで面白い見世物を発見したかの如く声をかけてくれた。台詞だけ聞けばダイを心配している風だが、実際はニヤニヤとダイを見やるだけで本当に助けようなどという気持ちは微塵もなく、ただただ面白がっているだけなことがよく分かる。

「あ、エルジュさん、こんばんは。明日また来るんで、私の防具の

サイズ合わせ宜しく願いますね？」

「うん、うん、任せときな。とっても可愛らしいの作ってやるからね」

「ありがとうございます」

につこり。極上の笑顔でそう感謝すれば、それまでずっと黙っていた（むしろあまりの痛みに喋れなかった）ダイがその赤く腫れた右頬を押さえながら、若干の涙目で抗議した。

「って、最初に話しかけられた俺を無視して話進めるな！」

「それじゃあエルジュさん、また明日」

「ん、また明日ねえ」

だがそんなダイなどどこ吹く風、2人でまるで示し合わせたかのようにダイを無視すると、そのまま私だけ先にダイの家へと向かう。ダイが付いて来ようがいまいが、お構いなし。

だから店先に残されたダイとエルジュさんがこんな会話をしていたのを、私は知らなかった。

「……俺これから先が不安になってきたかも」

「お前、普段は無駄に強気なくせに、ウィズにだけは弱いんだな」

「すぐ怒って暴力振るうウェルと、全く同種のエルジュさんには言われたくないですけどね」

その数秒後、ダイの私の時とは比べ物にならないくらいの悲鳴が

村中に轟くこととなる。口は災いのもと、とは先人の経験は偉大である。

第9話 朝のひと時

翌日、空は快晴。やはり雪山の麓の村だけあつて空気は冷たいが、直接差し込む日光がその肌寒さを随分と緩和してくれている。そのせいか、外を飛び回る鳥達も随分と活発なようだ。

昨日はあれから、一向に帰ってくる気配のないダイを他所に私はアイルー達と夕食がてら交流を深めた。この家にいるアイルーには大きく分けると2種類いる。1つがキッチンアイルーと呼ばれるアイルー達で、主にこの家の家事や主人の身の回りの世話などを行っている。もう1つがオトモアイルーと呼ばれるアイルー達で、コチラは主人と共に仕事に出掛け、共に戦うのが主な仕事だ。だがよく話を聞いてみると、そこまで完璧な仕事の割り振りが行われているわけではなく、お互いに協力し合いながらダイの生活を支えているようだった。

この家にいるアイルーは全部で4匹。キッチンアイルー3匹に、オトモアイルー1匹だ。アイルー達の話では、ダイのランクだったらもつと沢山のアイルーを雇えるらしい。だがダイ自身が何故かそれをしないために（キッチンアイルーのリーダー的存在であるチュックはその理由を「きつと旦那はアイルーを斡旋してくれるネコばあに会いに行くのがめんどくさいニヤ」と語っていた）、今はこの4匹で頑張っているらしい。

「お嬢、朝ですニャー！つてもう起きてるニャね。感心感心」

そう言つて私を起こしに来てくれたのはキッチンアイルのシヴァ。アメリカンショートヘアの可愛いアイルーだ。昨日会った時からすぐに私に懐いてくれて、それから何かと「お嬢、お嬢」と寄ってきてくれる。おかげでこの家のアイルー達にすっかり「お嬢」という呼び名で定着してしまった。

「ありがとう、起こしに来てくれて」

「これが仕事ですニャー！気にしないで欲しいニャー。それより、もう朝食の準備ができてるからキッチンに向かうと良いニャ」
「うん、そうする。ありがとう」

シヴァがダイを起こしに向かうのを見送つて、私はいそいそと着替えを始める。部屋の中とは言え、暖房器具を今着けたばかりの朝の室温はやっぱリキツイ。特に私は寒がりの末端冷え性だから、ちよつと堪えるものがある。

私はシヴァが用意してくれたこの辺の村独特の温かい洋服に、勢いをつけてバババーツと着替えた。こういうのは思い切りが大事なのだ、思い切りが。

部屋を出てキッチンへ向かうまでの廊下を歩く。途中シヴァ達がダイを起こすのに苦戦している音を聞きながら真っ直ぐに進むと、目の前に一際大きな木の扉。この向こうがキッチンだ。

「おはよう、皆」

「おはようニャ、お嬢」

「おはよう御座いますニヤ」

そこには、大きめの木製テーブルの上に朝御飯にしては随分と豪華な食事を並べているチュックとサテルがいた。2匹ともこの家のキッチンアイルー。どうやら唯一のオトモアイルーであるムートはシヴァと共にダイを起こしに行っているらしい。

「食器並べるの手伝うよ」

「それならそこにある小皿を1人1枚になるように配置して欲しいニヤ」

「了解」

私はチュックに言われた通り、料理台の奥にある食器棚から目当ての小皿を取り出すと、それを木製のテーブルに規則的に並べていく。『食事は皆で揃ってから』がダイの決めたこの家のルールの1つらしく、ダイが仕事でいない時を除いて、大抵の食事はアイルー達も含めた全員で食べるらしい。

最初に聞いた時は面倒じゃないのかな? と思ったりもしたが、そのルールは如何にも大家族で育ったダイらしい。きつとダイの実家でも似たようなルールがあったのだらう。アイルー達もこのルールを随分と気に入っているようで、「皆で食べた方が料理は美味しいニヤ」と言っていた。

「…おはよー」

「旦那、遅いニヤ! 料理が冷めちゃったらどうすニヤ!」

「悪い、チュック。それじゃあ早速食べようぜ。もう全員揃ってる

な？」

ダイの確認に皆がそれぞれ席に座る。席順はあらかじめ決められていて、私は昨日の夕飯の時にダイとシヴァの間、と決められた。

ダイがパンツと良い音を鳴らして手を合わせる。他のアイルー達も全員がそれに従うのを見て、私も慌てて両手を合わせた。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます（ニヤー）」

こうして私のポック村2日目の生活が始まった。

第10話 最初の笛

その後、食事は無事終わりそれぞれの仕事に移る。ダイとオトモ、アイルーのムートは農場での仕事、そしてキッチンアイルー達は朝食の片付けと家の掃除だ。

最初は私もキッチンアイルー達の手伝いをしようと声を掛けたのだが、昨日の夕飯時にエルジュさんの元で防具のサイズ合わせをする約束をしたことを話してしまっていたため「この人数で仕事するのは慣れてるニャ。遠慮しないで行ってくるニャ」と笑顔で送り出されてしまった。

それにしてもこの家のアイルー達は本当に働き者だ。私も大学近くのアパートで一人暮らしをしていたため、家事の大変さはある程度分かるつもりだ。掃除・洗濯・料理にゴミの管理、六畳一間の一人暮らしでさえ時々無性にサボりたくなるそれらを、彼らは広めの一軒家で、しかも2人と4匹分やらなければならないのだ。それなのに彼らは文句一つ言わず、キッチリと仕事をこなす。

昨日聞いた話では、今私が使っている部屋も私が来るまでは埃だらけの倉庫みたいな使われ方をしていたそうだ。この家が元々この場所に建っていた古びた家をリフォームしたものだということも関係しているが、最初それはそれは酷い部屋だったらしい。それをギルド経由でダイの連絡を受けてすぐ彼らが掃除をし、病人を寝かせられるまでにしたそうだ。

雇い主であるダイ自身も彼らのことは随分と誇りに思っているらしく、折に触れて彼らと親しくする姿からその思いの深さが窺われた。そんなダイとアイルー達を見ていると、私も1匹くらい飼ってみたいと思ってしまう。シヴァの話では不定期に村を回っているネコバアなる人物に認められれば、そのお婆ちゃんからアイルーを雇

うことが出来るらしい。だが認められるためには村長もしくはギルドからの依頼で、ある程度以上の結果を残さなければならぬ。そうやらまだ武器さえ手に入れられてない私には、アイルーを雇えるのはもう少し先のようなのだ。

「こんにちはー、エルジュさんいらっしやいますかー？」

私は武具屋の前まで来ると、おそらく店の奥にいるのであろうエルジュさんに声をかけた。やはり、ここはカウンター越しにでも暑い。鉄や鉱石を使う場面もあるから当然なのだろうが、それでもこの温度差が激しいとちょっと辛いものがある。

エルジュさん自身も、他の村人よりずっと薄い格好をしている。こんなところに四六時中いるのだから当たり前か。中でもその腰に巻かれたカラフルな布はまるで南国のような色彩で、この気温と相まって雪山の麓だと言うのに何だか南国気分になってしまう。

「はいはあい！って、ウエルか。思ったより早かったねえ」

「今お忙しいですか？」

「いやいや、むしろ丁度良いとこだったよ。さあさあ、ちょっとばつかし暑いけど中において」

エルジュさんは今日も腰に巻かれたそのカラフルな布でこめかみから滑る汗をふき取ると（その仕草がちっとも汗臭くなく、むしろ色っぽく見えるのは彼女の容姿の賜物だ）、私をカウンターの脇か

ら店の奥へと招き入れてくれた。

カウンターからでは見えなかったが、店の奥は大きく分けて2つのスペースに分けられているようだ。1つが鍛冶を行う場所。今は火は落としてあるが大きな大きな炉と、その脇に鞆ふいしが横たわっている。そしてもう1つのスペースが、幾つかの防具や武器が並んでいる場所だ。どうやらこれらはほとんど全て依頼品らしく、何かしら細かな字で書き込まれた書類が貼られていた。

「さて、早速で悪いんだけど、寸法測らせてもらえるかい？出来ればその毛皮の上着は脱いでね。さっきまで火つけてたおかげでそんなに寒くないだろう？」

「はい」

私が言われた通りに上着を脱ぐと、すぐさまエルジュさんによるサイズ測定が始まった。エルジュさんは私が退屈しないようにと思ったのか、腕や足・胴回りのサイズを測ってはメモに残しながら世間話を私にもちかけてくれた。

「もうこの村の雰囲気も分かってきたかい？」

「そうですね…。最初はどうかと思いましたが、この村の人達は皆さん優しくて」

「まあ、新興の村ってのもあるんだろうけどね。それにあの村長の力も」

「メルのことですか？」

「嗚呼。普通あの若さで村を起こそうって気になんて、なかなかないもんさ。しかも普通なら、村を起こしたって村人が集まらない」

「でもこの村は違いますよね」

「村長の亡くなった父親が随分な人格者だったのは有名な話でね、たぶん今ここにいる村人の半分は彼の父親に何かしら恩がある人間だよ。ただ残りの半分はあのメルって村長自身の人格で集めた村人だ。父親似的、本当に大した奴だよ」

「エルジュさんはどちらなんですか？」

「私は彼の父親に世話になった方さ。昔駆け出しの頃に、店を開く資金を援助してもらってね。おかげで今じゃ軌道に乗ったその本店は弟子に任せて、私はブラリこうやって長閑な村でゆつくりと暮らせてる。本当に感謝してもし足りないよ」

エルジュさんは今まで見せたこともないような穏やかな笑顔で笑う。私がそんな彼女に見とれる間も、エルジュさんはセッセと仕事を続けサイズ測定はすぐに終わった。

「じゃあ、これからのために、この店で出来る基本的なことを説明しとくよ」

沢山の防具や武器に囲まれたスペースの真ん中に、それまで端に寄せられていた小さな円卓を運び出すと、何やら大きめのファイルと共に席に着く。私もエルジュさんに従って、その向かいの椅子に腰を落とした。

「ここで出来るのは大きく分けて4つ。武器や防具の売買・生産・強化、それから装飾品関連だ。まず武具全般の売買だがこれは説明しなくても分かるな」

「はい」

「次に武具の生産と強化だ。生産は武具を1から新たに作ることで、強化は元ある武具を更に強くすることだ。だが、どちらにしても素材が必要になる」

「素材、ですか？」

「そう。狩ったモンスターから剥ぎ取ったもの、各仕事場で採取したもの、農場で入手したもの等入手方法は様々。だが武具を生産・強化するには決まった素材を揃える必要がある。そこで必要なのがこの素材リストだ」

エルジュさんはその青と赤、2冊の分厚いファイルをバンバンツを叩いて見せた。上に乗っていた赤のファイルを見ると、その表紙には少し小さめの黒文字で『武器素材表』と書かれている。推測するに、どうやら青のファイルは防具に関する素材表なのだろう。

「より強い武器や防具を作るには、より強いモンスターを倒す必要が出てくる。逆に言えば、より貴重なアイテムが手に入ればそれだけ強い武具を作れるって訳だ」

「つまり、いろんなモンスターを倒せば倒すほど、より多くの武具を作れるわけですね」

「そ！今回は最初だからダイが素材を提供してくれるってさ。アイツ自身の武具作成の関係もあるからあんまり上位の素材は使えないけど、それでも初心者にはちょっと贅沢なくらいの防具が作れそう

よ」

後でお礼言つときなさいよ？というエルジュさんの台詞に、私は素直に頷く。何だかんだ言ったって、やっぱりダイは優しいというかお人好しというか。厳しく指導するぞなんて言った割にはこうやって上等な防具を作ってくれたり、少し甘やかされている気分になって恥ずかしい。

「それから装飾品についてだけど、これは武器や防具についている“スロット”って穴に関係してるの。スロットには装飾品をはめ込むことが出来るんだけど、装飾品にはそれぞれスキルを発動させる力が込められている。つまりスロットに装飾品をはめ込むことで、様々なスキルを発動できるようになるのね」

「スロットって1つの武器に幾つぐらいあるんですか？」

「多くて3つ、弱い武器にはスロットが開いていないものもあるわ。ま、これについては後々詳しく教えてあげる。一気に知識詰め込まれても大変でしょう？」

「そうですね」

「じゃあ、これで最後ね……」

一通り話を終えたエルジュさんは、沢山の大剣や太刀の中から、わたしにが待ちに待っていた“それ”を取り出した。

「はい、約束の笛“骨笛”よ。レア度　つまり武器自体の貴重度や価値のことね……は低いけど、ここからいろんな笛に強化できるわ。まずは毎日背中に背負って持ち歩いて、愛着と筋力をつけることね」

「はい！ありがとうございます」

“骨笛”はその最上部に、人の頭3つ分くらいある大きな丸骨に数本のトゲの生えた演奏部を持つ。武器を決まった向きへ振り回すことで空気が吹き込まれ、その演奏部の真ん中にある青い蓋が開閉することで音が出るようだ。演奏部からは真っ直ぐに棒が伸びており、武器として扱う場合はその柄の部分を持って演奏部をまるでハンマーのように振り回す。

柄の部分には持ちやすいようにかシツカリと布が巻かれており、その小さな配慮が嬉しかった。

「また素材が集まって強化できそうになったり、他の種類の武器を作ってみたくなったらいつでも声掛けてね」

「はい」

私はエルジュさんに丁寧に頭を下げると、ひとまず農場にいろであろつダイにこのことを報告すべく、さっそく笛を背に担ぐと、そのまま意気揚々と農場へ向かった。

第11話 執事アイルー

私が農場に到着した頃、丁度太陽は頭上近くまで昇っていた。

村の中央に位置する武器屋からこの村外れの農場まで少しばかり急いで走ってきた私は、その日光と運動量のおかげで結構な汗をかいていた。それを乱暴にグイッと袖で拭くと、とりあえずダイとムートを探すことにする。

農場は「最近ようやくそれっぽくなってきた」とダイが言う通り、まだまだ発展途上な感じが漂っている。道も舗装されていると言うよりはただ草を刈った獣道的なものだし、畑の畝も釣りのための栈橋もキノコ採取のための場所もまだまだ少ない。これから採掘や虫取り場所などを設ける予定ではいるようだが、まだまだそこかしこで雑草が生え放題だし無駄なスペースも多い。

それもそのはず、この農場をダイが持ち始めたのも実は極々最近なのだ。それまで金銭面で不安があるし、何より農場を経営する人手（もしくは猫手）が圧倒的に足りないという理由で農場を買い取れることをしなかったダイ。

だがそんなダイを説得したのは、意外にもメルだった。私が担ぎこまれた時に、アイルー達の「そうニャ、そうニャ！」という盛大な援護付きで「これから彼女（つまり私）を養っていく気なら、これまで以上に食材や素材の面で金銭的工夫をしていくべきである」と説き伏せたらしい。以来、ダイ家のアイルー達はメルを慕うようになったとか。今ではアイルー達の食事に招かれる程だと言う。

「あ、お嬢!」

「ムート、ご苦労様」

そうして、ダイとアイルーは休日の度に農場で体を動かす日々を続けている。特にムートは元々体を動かすのが好きらしく、よくダイに着いて農場に来ることが多くなった。最近はオトモアイルーとしてモンスターを倒しに行くよりも、休日に農場で働く方が最近は楽しくてしょうがないらしい。ダイは「困ったもんだ」と頭を抱えていたが、いかにも働き者なダイ家のアイルーらしかった。

「そろそろお昼にしようって言おうと思って来たんだけど、ダイはどこにいる?」

「旦那さんなら、今は釣りに夢中ニヤ」

「釣りって…。その時間で少しは働こうって気になんないのかね? アイツは」

「まあまあ。今日の成績は上々らしいから、おかげでお昼に沢山お魚が食べれるニヤ」

「その話はもうチュック達には?」

「してあるニヤ。さっき休憩がてら家に行って言つといたニヤ」

「うーん、流石だ…。ダイの家のアイルー達って何か優秀な執事とかになれそう」

「執事、ニヤ?」

「うん。大きな屋敷の主に仕えて、家のこと全般を取り仕切る人のこと。なんか抜け目ない仕事っぷりが、似てる」

ムートは“執事”を褒め言葉だと受け取ったらしく（まあ、実際に褒め言葉であることに間違いはない）、丁寧にペコリと頭を下げ「ありがとうございますニヤ」とお礼を言う。そんな礼儀正しい所まで執事向き。そんなムートに「どう致しまして」と言いながら、脳内で黒燕尾を着せてみる。

…似合うぞ、確実に。

私は近い内に、普段頑張ってくれているアイルー達へのお返しとしてプレゼントをすることを決めた。裁縫は得意だ。あとはどこかで針と糸、それから黒い布と釦を調達すれば…。

「さ、そろそろダイに声かけて帰ろう。きっとチュック達も下拵え終わらせてるだろうし」

「はいニヤ。じゃあ、先に魚を持って帰るので、お嬢は旦那さんと新しい武器の話でもしながらゆっくり帰ってくると良いニヤ」

ムートがそう言い残して先に棧橋の方へと走って行く。私がこの“骨笛”のについてダイと話したがっていることまで察してくれるとは、本当に執事の鑑。これはますますプレゼント（と言う名の自己満足）の制作を急がねばッ！

「おう、ウェル。あ、それが新しい武器か？」

「そう。“骨笛”って言うんだって。エルジュさんが言ってた」

「初心者ハンターが一番最初に手に取るのがその骨笛だからな。笛の扱いの基本はソイツで学ぶと良い。後で砥石の使い方とか、武器の管理の仕方教えてやるよ」

「うん、ありがとう」

ダイは先に魚だけムートに渡したようで、まだまだ短い栈橋の先で釣り道具や餌を片付けていた。私はその横から農場脇を流れる川を覗き見る。

川は穏やかだが大きく、水浴びで遊ぶくらいなら出来そうだが、対岸へ渡るとなれば舟がなければ行けそうにない。だが流れる水は湧き水であるため透明度が高く、優雅に泳ぐ様々な魚を肉眼で見ることができた。海育ちの私でも殆ど名前の分からない魚ばかりだったが（つまり現実世界とは全く違う種類の魚なのだろう。勿論、生態系自体が全く違うのだから当たり前かもしれないが）、中にはピンク色の綺麗な魚や金魚の白バージョンのものなどもいて、見ていてまったく飽きなかった。

「今日は何が釣れたの？」

「ハジケイワシとハリマグロだ。今日は数が多かったから、もしかしたら夕飯にもでるかかな」

「って言うか、釣りばっかしてて良いの？ちゃんと農場整備しなさいよ」

「分かってるって！ただつい釣り竿に手が…」

「アンタってそんなに釣りオタクだったっけ？」

「オタク言っくなッ！ただ師匠が釣り好きで、それにっられて俺も好きになっただけだよ」

「ふーん」

まあ、この川を見ていると釣りでも水浴びでも何でも良い　とにかく、遊びたくなる気持ちは分かる。私ならそこで迷いなく水浴び、というか水泳を選択するが、ダイはそれが釣りだってだけのこと。今度キツチンアイルー達も連れてきて、たまには仕事を忘れて

皆で遊ぶのも良いかもしれない。

「あ、そう言えばお前午後暇だろ？」

「うん、とりあえず予定はないよ？」

「じゃあ、メルのとこ行ってやって。お前に頼みたいことがある、
って言ってたから」

「私に頼みたいこと？」

ダイが釣り道具一式を持って立ち上がったので、私もそれに習う。
その道具はおそらく、農場入口にある道具を仕舞っておくボックス
の中に片付けるのだろう。

「ほら、例のハンターの出迎えじゃないか？昨日言ってたろ、村長
の友人の村から優秀なハンターが来るって」

「あ、そう言えば」

「本当なら俺も出迎えに行くべきなんだろうが、生憎午後からギルド
に仕事頼まれてさ。お前行ってくれよ」

「うん、勿論良いよ」

私が頷けば、「何か困ったことあったら、ギルドにいるタルクに
聞けば大体は何かなると思うからさ」と頷き返す。

そうして釣り道具をシッカリとボックスに収めた私達は、そのま
ま働き者のアイルー達と美味しい昼食が待つであろう自宅へと急い
だ。

第12話 2人目の出会い

「メルの話じゃ、この辺だと思っただけど…」

私はメルから預かった地図を片手に、独り、雪道を歩いていた。雪道と言っても、いつも窓から見えるあの雪山に足を踏み入れたわけではない。ここはポック村と数km離れた隣村を繋ぐ唯一の公道。だが公道と言えどもモンスターは出現する。むしろ商品を携えた商人などはこの公道をよく使用するため、それを狙ったモンスターの出現は多い。また極偶にはあるが、道に迷ったモンスターが人の気配に惹かれて出没することもあるそうだ。そういった意味では、むしろ公道の方が危ないとも言える。それ故に私も、一応ではあるが、背中に“骨笛”を背負って歩いていた。

そもそも何故こんなことになったのか。話は約1時間前に遡る。

「お願いというのは他でもない、ウェルに昨日お話ししたハンター殿を迎えに行って欲しいんです」

メルは午後になって自宅を訪ねた私に1杯の飲み物を差し出すと、

早速そう切り出した。

「あの優秀なハンターさんだよね？」

「ええ。先程隣村から連絡がありまして、ついさつきそのハンター殿が到着されたそうです。で、出来れば日が沈む前にこの村に到着したいと言っていたので、すぐに発つと」

「せっかちな人なんだね」

「『^{かみかせ}神風』の二つ名も、もしかしたら性格に起因しているのかもしれないですね」

「二つ名、って？」

「嗚呼、まだウェルに説明していませんでしたね。“二つ名”というのは、優秀なハンターにのみ与えられる称号のようなものです。ウェルはハンターランクというものを御存知ですか？」

「その名の通りハンターに与えられるランクのことだね？初心者ハンターはランク1。で、ギルドでより難しい仕事をこなしていくと1から2、2から3、3から4……っていう風に上がっていく」

「その通りです。ですがギルドの仕事は年々危険度が上がっていることもあり、1人ではなく2人以上で取り組むことも出来るようになった。つまり、ハンターランクはその人個人の能力を正確に示しているとは限らなくなっただけです」

「個人の能力はもつと低いのに仲間と一緒にギルドの仕事をクリアしちゃうことで、能力以上のハンターランクをもっている人が現れたってことね？」

「そうです。そこでギルド内部でハンターランクとは別に、個人の能力に基づいた評価をするようになった。これがアルファベットによる“ハンタークラス制度”です」

「ハンタークラス制度？」

「能力が下の者からF・E・D・C・B・Aクラスに分けられ、そして最高クラスのハンターにのみSクラスが授与される。そしてこ

の数少ないSクラスハンターにのみ付ける事が許されたもの、それが“二つ名”です。この“二つ名”で呼ぶことはその人への尊敬の現われであり、また任務においてはコードネームとして使用されることもあるそうですよ」

「へー。ハンターじゃないのに詳しいね、メル」

「実は、全部タルクの受け売りなんです。『メルヴィスは村長のくせに何も知らなすぎる!』と怒られましてね」

メルはお茶を啜りながら少し恥ずかしげに首を傾げる。村長なのに村民に怒られるメル　なんだか酷く情けない気もしたが、このフラットな感じがその村の特徴なのだろう。とりあえず私はそう言う事で納得することにした。

「これが、このポック村から隣村であるポッケ村へかけての地図です」

「公道が1本だけなんだ」

「はい。新興の村なので、内部を整備するだけでイッパイイッパイですからね。まだ周辺との交通の便は図れていないのが現状です」

「でもおかげですれ違いとかはなさそうだね」

「ええ。ただし気をつけて下さいね。公道と言えども稀にモンスターが出ます。本当ならダイがいる時に来てくだされば良かったのですが、そう都合良くいくわけでもないですからね。本当に申し訳ないので…」

「平気平気!今日一応武器もらったし、モンスターも稀にしか出ないんでしょ?何とかなるって」

「それじゃあ、申し訳ないのですが宜しく願いしますね」

これが約1時間前にメルの家で交わされた会話だ。それから私はすぐに準備を済まし、村を出た。メルの話では、これも立派に村長からの依頼という形なので、終了次第私宛に報酬を出してくれるそう。つまりこれがポック村での初任務。

「頑張んなきゃね！」

私は一応周囲の音に警戒を怠らないよう、慎重に公道を進んだ。いくら偶にしかモンスターが出ないと言ったって、逆に言えば偶には出るのだ。そこを安心して警戒を怠るようではきつとハンターなんて厳しい仕事、やっていけない。それだけは私にも分かっていて、それにあくまで個人的な勘でしかないが、今日はとても嫌な予感がしたのだ。

そして、そういう嫌な予感というものは往々にして的中してしまうものである。

「ギャウ、ギャー」

「げ、ギアノス!？」

いきなり視界の外、遙か上空の岩肌から跳躍するようにして私の眼前に現れたそのモンスターはギアノス。烏竜種と呼ばれる種類のモンスターで、その真つ白な肌と黄色い嘴が特徴的だ。後ろ足2本で立ち上がり、前の2本には鋭い爪がある。また当たると雪だるまのような状態になってしまう氷液を吐き出す点も大きな特徴であると言える。同じ様な形態で青い肌を持つランポスが、雪山で生き抜くためにこの様に進化したと考えられている。

「って、冷静に分析してる暇はない!」

私は慌ててギアノスジャンプ（今勝手に命名。ハンターに向かって飛び掛ってくる攻撃のこと）を避ける。ギアノスはそんな私を完全に敵と見なしたようで、「ギャウギャウ」と可愛らしくもない鳴き声でコチラを威嚇してくる。そしてそれに素直に怯みそうになる私。

「いかんいかん!こんな雑魚モドキにやられるわけには……」

だが私の呟いた“雑魚モドキ”という評価が許しがたかったのか、ギアノスは再び私目掛けてギアノスジャンプを繰り出してきた。再び、慌てて避ける私。うつむ、こうもすばしっこく動かれたんじゃどうしようもないよ…。

私がジリジリとした睨めっこをしながら途方に暮れた時、懐かしい声　しかも非常にのほほんとした声が聞こえた。

「はい、ここで復習です。ギアノスとかランポスを倒す時はどこを位置取るのが良いんだっけ？」

私はテンパツた頭で、だが兎に角ギアノスから視線をそらすことはせずに、その問いに答える。

「側面！」

「正解。はい、じゃあやってみよう」

のほほんとした声は続けて「頑張れー」などと声援を上げている。私はその声に若干の苛立ちを覚えながらも、今はその怒りをギアノスにぶつけることだけに集中する。

私はギアノスが回り込むよりも早くその側面を取ると、それまで背中に担いでいた骨笛を思いっきり振り回した。

「おー、クリーンヒットだね」

「アンタは煩いッ…！」

だがそののほほん声の言った通り、その攻撃でギアノスの足に鈍痛が走ったようだ。ギアノスは先程よりも若干弱弱しい声で鳴くとフラフラと足を繚もつれさせた。

その隙に私はもう一度、今度は左から右へと笛を振り回す。その衝撃でギアノスは地面から吹き飛ばされ、公道脇の岩肌に叩きつけられた。死んでいた。私が勝ったのだ。

「お見事、お見事」

だが初勝利の余韻もホンの僅かしか続かない。それは先程から戦闘に何かと茶々をいれていたこののほほん声！

私はギアノスにぶつけても未だ余りあるその怒りを当人にぶつけるべく後を振り向いて、

「やあ、久しぶりウエル」

驚いた。

「もしかして、シュナイゼル（shnaizer）？」

そこには現実世界にいた時と変わらない、どこか天然ボケした笑顔で立つ1人の青年がいた。

第13話 天然のSクラスハンター

「な、ななななな何でアンタがここに？」

「聞いてない？今日密林の方から来るハンターのこと」

「いや、それは聞いてるけど、そういうんじゃないって…」

「嗚呼、何でモンハンの世界にいらかってこと？それなら君達と同じく飛ばされてきたんだよ。詳しい話は順を追ってするから、まずはポック村へ行こう？いくら公道とは言え、夜の雪山は危ないからね」

今は夕方。だがもう暫くすればすぐに日は落ち、雪山特有の凍てつく夜になるだろう。シュナイゼルの尤もらしい言い分に、私はそれまでシツカリと右手に握っていた笛を背中に戻すと、渋々ながらポック村への道のりを戻ることにした。

シュナイゼルの本名は北神柳^{きたがみりゅう}。私や大樹と同じく大学のテニスサークルの仲間であり、モンハン仲間でもあった。普段ののほほん具合とその女顔なところ（本人にこれを言うとは拗ねるからあまり言わないようにしている）からは想像出来ないかもしれないが、その類稀なる器用さと判断力のおかげで、これでもサークル内のハンター

の中では最強を誇っていた。

その腰には2つの刃。どうやら現実世界でゲームをやっていた頃と同様、今でも双剣を得意としているようだ。だがやはり器用な柳のことだ、おそらくコチラの世界でも大抵の武器は扱えてしまうのだろう。でなければSクラスハンターになどなれはしない。

「柳が飛ばされてきたのはいつ？」

「その名前で呼ばれるの久しぶりだ。でもコッチでは以前みたいにシユナって呼んでよ」

シユナイゼルだからシユナ。これが彼の親しい人が呼ぶ呼び名である。本来なら私と彼ではクラスどころかハンターランクでさえ大きな違いがあるため、尊敬の念を込めて『神風』という二つ名で呼ぶべきなのだろうが、それはそれで何だか寂しい気がする。だから私は彼に言われた通り、シユナと呼ぶことに決めた。

「了解。あ、ちなみに私は以前と変わらずウエルトって名乗ってるから、ウエルって呼んで」

「うん。…でも変な感じだね、顔は知ってるのに名前を知らないなんて」

「しょうがないでしょ。飛ばされた人全員が、現実世界のゲーム内で決めた名前を名乗ってるかどうかなんて分からないんだから」

「うん、それもそうだね」

「で、シユナが飛ばされたのはいつなの？」

「大体1年半前、かな？」

「そんな前に!？」

「うん。ダイとウエルは？」

「ダイは私より数ヶ月前。私は本当について最近で、数日前だよ」

この笛も今日受け取ったばかり、と背中の中を指し示して見せる。

「やっぱりウエルは笛なんだね」

「ダイも相変わらず大剣だよ。シュナはやっぱり双剣？」

「うん、これが一番扱いやすくて。Bクラスくらいに上がってからいろんなクエスト受けることが多くなったから、他の武器も使えるようにはしてるけどね」

そう言えば、と私は思った。シュナの荷物が少なすぎる。さっき言った双剣以外の武器にしてもそうだし、これからポック村で生活していくならいろいろ身の回りの品が必要になるだろう。だが彼が持っているのは、旅に出るのに必要最低限のものしか詰め込まれていないであろう大きめのリュックのみ。

シュナにそのことを問いただしてみると、彼は「嗚呼、それなら」と頷いて、

「荷物は明日か明後日にでも届く手筈になってるよ。元いた村で懇意にしてくれてた商人さんがてね、彼がコッチの村を回るついでに持ってきてくれるんだ」

「だから手持ちの荷物が少ないのね」

「そ。コッチにはダイもウエルもいるし、暫くこのポック村を拠点とするつもりでいるから。宜しくね」

「こちらこそ」

私は自分より少し背の高いシユナを見上げ頷くと、再び視線を道の先に戻した。そこにはぼんやりと浮かぶ暖かな光の塊。ポック村である。もう夕日も落ちて暗くなっているせいで、皆家に明かりを灯したのだろう。それが集まって、まるでオレンジ色の大きな蛍のよう。

「綺麗だね」

「でしょう？……って言っても、私も今日初めて見たんだけどね」
「村長も若いながら有望だって聞いたよ。きつとこのポック村は、じきにとても賑やかになると思う」

「何せSクラスハンター様がいるんだもん。きつとこの辺に住んでる新人ハンター達が、教えを請いにこぞって集まってくるわよ？」
「僕もそれは大歓迎だよ。有能な新人ハンターを育てるのも、Sクラスハンターの大切な仕事の1つだからね。あ、でも勿論仲間優先だけど」

そう言っ、シユナはその厳つい装甲のついた手で私の頭を撫でる。ガシャガシャと継ぎ目が煩く鳴ったが、頭に乗った手からはたいた重さを感じなかった。加減されたのかもしれない。

「別に私優先じゃなくても良いんだよ？ほら、一応ダイだっていうわけだし」

「ダイは人に教えるのには向いてないよ。ウェルもそのことは知ってるだろう？」

そう、それは私もつくづく身に沁みて分かっていった。何故なら彼は、せつかちなのだ。現実世界にいた時も、人に教えている内にいつの間にか自分で敵を倒してしまう、ということも稀ではなかった。きつとそれはコチラの世界にきてても変わっていない。

それに比べてシュナは、人にものを教えるのがとても上手かった。生徒が答えを出すまでいつまでも待てるし、絶妙なタイミングでヒントや手助けをしてくれる。提案するのはいつも少し危険な訓練であつたが、必ずその人の身になるような教え方をした。

だから私もムコウの世界にいた時は、手助けが欲しい時にはダイに、そして何かを教えて欲しい時はシュナに頼むようにしていた。

「それは分かつてるけど…。でもSクラスハンターって忙しいんでしょう？それなのに貴重な時間を、私だけが覇履されてるっていうのも何か申し訳なくて」

「それはウエルが悩むことじゃない。チームはお互いに成長しあつてこそチームだし、それに…」

「それに？」

「ウエルを覇履したいのは僕の意味だよ」

私はシュナの言葉に「うっ…」と詰まる。分かつてる、分かっているとも！これはシュナの天然のせいで、この言葉に深い意味はないッ！！

だが彼のこの天然故の発言に、数多の女の子がやられてきたのだ。本人にその気がなくともこういった意味深な台詞（実際は何も考えてないだけ）に女の子が勝手にその気になり、柳に告白して振られる。私は柳の友人として、サークル内外を問わず沢山のそういった現場を目撃してきた。おかげで私自身はこういった台詞を投げかけ

られても自制できるようになったのだ。

私はふう…と溜息を一つ吐くと「兎に角、」と続けた。

「シュナがそう言うならお願いするよ。実際に私はまだ初心者も良いとこだからさ」

「うん、任せて。きっとウェルを一流のハンターにするから」

「精々期待しとくよ」

私がそう呟いたところで、タイミングよくポック村の入口に到着した。そこには村の入口に相応しく“ポック村”と書かれた木製の門（と言っても扉があるわけではなく、鳥居のような形をしている）が立っている。

「まずは村長さんに挨拶に行こうか。もう結構な時間だから、ギルドとか武具屋とかには明日案内するよ」

「そうだね。頼むよ」

「はいな。じゃあ、村長の家はコッチ。着いてきて」

私とシュウはこうして村長であるメルヴィスの家へと向かった。

第14話 訓練所教官

「ようこそ、ポツケ村へ。『神風』」

「こちらこそ迎えにまで気を遣って下さって、本当に感謝します。村長」

「……、なんか気持ち悪い」

メルの家にはそれから程なくして到着した。

村長の家に行くには、鬱蒼と木が生い茂る少々急な坂を登らなければならぬ。最初大きなリュックを担いだままのシュナを心配したのだが、流石Sクラスハンター。かなり鍛えられている体にはこれくらい何でもなかったようだ。

そしてリビングに通され、当初の会話に至る。

「2人とも同じ年なわけでしょう？それなのに何でそんな堅っ苦しい喋り方してんの？」

「いや、だって世界に20人といないSクラスハンターですよ？私のような若造が気軽に喋れるわけじゃないですよ」

「いえいえ、そんな大層な身分じゃないんですよ。それに、これからお世話になるのはむしろコチラの方ですから」

「……もう何て言うか、良いじゃん。普通に話せば。聞いているコッチが鳥肌立ちそうなんだけど」

「んー、まあウエルがそう言うなら……。良いですか、村長さん？」

「ええ。是非、メルとお呼び下さい」

「それなら僕のことシユナと呼んで下さい。その方が嬉しいです」

「分かりました」

そうして改めてシュナとメルが握手を交わす。どうやらこれ、いやに他人行儀な2人の会話を聞いて鳥肌を立たせることもなく、りそうだ。

「シュナさんは、これからこのポック村を拠点となさるそうですが」
「うん。ここでダイとウエルと新しいチームを組んで活動していると思うってます。だから遠慮せずに村の仕事回して下さいね」

「ありがとうございます。正直新興の村なので、ハンター不足に困っていたんです」

「最近までずっとダイ1人だったと聞きました」

「そうです。ですがウエルもハンターとしてやっていくと宣言してくれましたし、その上更にSクラスハンターのシュナさんが加わって、本当に心強いです」

「少しでもこの村のために頑張りますね」

シュナがメルに出されたお茶を片手ににこり、と笑う。もしシュナがSクラスハンターだと知らなかったら、ただの優男にしか見えないだろう。そんな男がこの世界に十数人しか持っていない二つ名を持つているというのだから、世の中は本当に不思議だ、としか言いようがない。

「それで、図々しいとは思ったのですがシュナさんをお願いがありました……」

「お願い、とは？」

「ええ。ギルドや私からの依頼がない時、しかも気が向いた時だけで構わないので、この村の“訓練所”を取り仕切っていただけませんか？」

「訓練所、ですか？」

「はい。これまで一応設備だけは整えてきたのですが、実際には教官も生徒もない状況でした。しかし貴方がポック村に拠点を構えると知った近隣のギルドや村長から、是非シユナによる訓練所を開設して新人ハンターの育成を行って欲しいという要望が現在殺到しています」

「随分情報が早いね？」

「なにせ偏狭の村々ですからね。情報の広がりだけは早いです。どうでしょう、お願いできませんか？」

シユナはその手を顎に当てて（シユナが考え込む時のお決まりのポーズだ。どうやら癖らしい）一瞬だけ悩んだようだったが、すぐに答えを出した。

「良いですよ。どうせウエルの指導がてら新人の育成は行うつもりだったし、以前いた村でも訓練所の教官をやったから出来ると思います」

「本当ですか！？」

「うん。任せて下さい。ちなみに訓練所でのメニューは僕が決めても良いんですか？」

「はい、構いません。訓練所自体はギルドの横に入口があつて、そこから訓練に必要なものが置いてある倉庫や教官が雑務を行う教官室、講義などを行える教室のような場所に行けます」

「それだけあれば十分。ありがとう御座います」

「いえ。あ、それから教官をやっていただけということで、私の

方から報酬を出しますね。おそらく多くは出せませんが、まあお小遣い稼ぎぐらいにはなると思っているので何かの足しにでもして下さい」

「助かります」

メルはおもむろに席を立つと、すぐ傍にあつた本棚から薄めの冊子を取り出し、それをシュナの前に置いた。表紙には『訓練所マニュアル』の文字。

「その冊子には、具体的な訓練内容の例や事務処理の仕方などがまとめられています。以前訓練所での共感経験がありとのことと訓練内容の例などには必要ないでしょうが、事務処理の方に関しては幾つかギルド向けの書類なんかに細かな決まりがあるので目を通していただけると助かります」

「分かりました。何から何までスミマセン」

「いえ気にしないで下さい。それより、もうこんな時間です。そろそろ体を休めた方が良いでしょうね」

「わ、ホントだ。そろそろ帰らないと、私もアイルー達に怒られちゃう！」

それまで話に夢中になっていて気付かなかったが、私達は結構長い時間話込んでいたらしい。窓の外を見るとそれまで薄暗いという程度だった空が、いまや漆黒。時計を確認せずとも、もう夕飯の時間が近いことがわかれた。

「それじゃあウェル、シュナを君達の家に案内してあげて下さい」

「ん？ダイに挨拶にでも行くの？」

「あれ、ダイから聞いていませんか？これからシユナは貴方達と同じ家で生活していくんですよ？」

「……。初耳、なんだけど」

「おかしいですね。今日の午後仕事に出掛けるダイに最終確認をした時には『全然構わない』と言っていたのですが」

「じゃあきつと、ダイが勝手に決めちゃったんだね？」

「あつ、んのヤローーーーー！！！！！！」

私は力の限り右拳に力を込める。　　うん、家に帰ったらコレをこのままあの馬鹿にお見舞いしてやろう。うん、そうしようそうしよう。

「……ダイはあの拳を受けて、生きていられますかね？」

「まあ、気絶して夕食ぐらいは食べ損ねるかもしれませんがねー」

「何をゴチャゴチャ話してんの！？さつさと行くよ、シユナ！」

私はこめかみがピクピクと青筋を立てるのを感じながらも、ドスンと女の子にあらざる足音を立てながらメルの家を去った。

残されたのは、ただひたすら呆気に取りられる村長と、こんなことじゃ動じないSクラスハンター。

「さて、じゃあ僕も帰ります」

「あ、はい！今日は遅くまで引き止めてしまつてすみませんでした」「いえいえ。現状の異変に関する詳しい話などについてはまた明日、ということだ」

「そうですね。あ！その時ウェルも一緒に連れてきて下さい」

「ウエルですか？」

「はい。今日の報酬を渡し忘れてしまったので」

そう言つてメルが取り出したのは『報酬 要人の出迎え』と書かれた封筒。これがそのウエルへ渡すはずだった報酬のようだ。

「分かりました。必ず」

「お願いします」

「それじゃあ、また明日」

「また明日」

こうしてシュナは少々道に迷いながらも（案内役が先に帰つてしまったのだから当然だ）、村人に「とつてもご立腹な、まるで大型竜みたいな足音立てて歩く女の子見ませんでしたか？」と聞いて回ること無事ダイの家に着した。

「ちょ、ウエル！！ちょ、ちょっと落ち着け！なッ！？」

「問答無用！！！！」

だはそこには既に1人、確実に夕飯を食べ損ねるであろう男が伸びていたそうな。

第15話 Sクラスハンターの欠点について

ダイがすっかりしつかり夕飯を食べ逃した、その翌日。

「さて、ウエル？準備できた？」

「うん、シュナ。今行く」

昨日から隣の部屋に住み始めた住人が自室のドアから顔を覗かせたので、私は今日も愛用の（と言ってもまだ戦闘じゃ1回しか使っていないけど）骨笛を背中に担ぐ。

昨日お昼を食べる時は自室に置いていつてしまったので、実質夕飯時に初めてこの武器を初めて触った我が家のアイルー達はその大きさと重さに驚き、でも最終的には「これを担いでるならいつでもお嬢が見つけやすくして良いニヤ」と私とは別の意味で気に入ってくれた。

そんな愛嬌もある働き者のアイルー達に、シュナも昨晩だけで随分気に入られたらしい。それは、「これからお世話になるんだし」と言って全員に配ったマタタビの効果が影響していると思われる。だがそれ以上に、キッチンアイルーの内の1匹であるサテルが彼に懐いたのが非常に大きい。

キッチンを仕切るのがリーダーのチュックであれば、このサテルは家事全般を仕切るのが役目。キッチンで料理をする時はチュックの指示に従って動くのだが、いざ家全般のこととなるとシヴァは勿

論、チュックまでもを従えさせる。謂わばアイルー達のお母さん、もしくはお姉ちゃん的存在なのだ。

そんなサテンが一目でシュナを気に入ったのだ（本人曰く、恥らう乙女ポーズ付きで「一目惚れ…ニヤ」だそう）。他の者が逆らえる訳がない。もし少しでもシュナを邪険に扱う素振りを見せようものなら、翌日から自分の分の洗濯や寝床の掃除だけやってもらえなくなるかもしれないのである。そんなサテルの権力掌握っぷりを見て、私が思わずエルジュさんを思い浮かべてしまったのは、サテルにもエルジュさんにも秘密だ。

「まず村長の家に行つて会議、それから午後には訓練所に行こう」「訓練所に？」

「そう。まず笛の基本的な動作とか教えないとね。それから戦闘の基本とか」

「ゲームの時と同じじゃないの？」

「ゲームでボタンを押すのと実際にやるのじゃ全然違うよ。まあ、その辺も詳しく教えてあげる」

「宜しく頼みます」

「任せといて」

村長の家に向かいながら2人で今日の予定を立てる。

昨日の夜ダイと3人で話し合った結果、私は暫くシュナと共に訓練を受けるということになった。私もシュナもこのポック村に来たばかりだから村に慣れることも必要だ、というダイの提案だ。訓練の間は少しくらい村を離れることはあっても、クエストの時程長い時間村を出ることはなくなる。村にいる時間が長ければそれだけ村に馴染むのも早くなるだろう、というわけだ。

そして残るダイは、農場の整備とクエストを交互に行うことにな

った。何より生活費を稼ぐためだが、それ以上に体に負担をかけさせないためである。アイルー達によると、私達が来る前のダイはただひたすらにクエストを受け続けていたらしい。それは彼自身が持つこの村の役に立ちたいという強い思いと、それ以上にモンスターと対峙するのが楽しいという思いからのようだ。だがそんな連続でクエストを受け続けていたら確実に体を壊す。現にクエストを出す側のメルやギルドのタルクさん達にまで心配されていた、とのこと。そんな過去を聞いて、昨夜シュナがダイを説得した。最初は随分と渋っていたダイであったがシュナが、武器や防具を強くするためには農場での資源が必要不可欠であることや、常日頃一生懸命働いてくれているアイルー達に食事の材料を運んであげることと恩返しになる、といったことをツラツラと説明。最終的にはアイルー達の「そうだ、そうだ！」と言う抗議に折れる形となった。どうやらダイ自身も毎日お世話になっっているアイルー達には、メッキリ頭が上がらないようである。

「それにしても報酬を受け取り忘れるなんて、ウエルもオツチヨコチヨイだね」

「あれはおつちよこちよいか関係ないから。って言うか、ダイのせいだから」

「あらら、照れちゃってー」

「照れてない！確実に照れてない！！相変わらずよく分かん話の展開をするなッ！！！」

精一杯抗議をする私に、だがシュナはあははーと暢気に笑いながら「怒ったウエルも可愛いねー」などとほざくだけ。もう随分と慣れたつもりでいたが、コイツの天然っぷりには呆れるしかない。昨日の夜ダイを説得している時など凄くシツカリしていて、コチラの

世界に来て成長したのかと折角感心していたのに。 これはその
認識を改めなおすしかなさそうだ。

「ほらほら、もうメルの家着くよ。機嫌直して？」

「……悪くしたのはどこの誰だ」

「そりゃ、僕だけどさ。でもその仏頂面でメルに会うわけにもい
かないでしょう？」

「分かったよ」

シユナに上手く丸め込まれた感是否めないが、指摘された通り、
このままメルに会うわけにもいかない。会議にも支障が出るだろう。
私は気を取り直すと、コホンツと一つ咳払いをしてメルの家のだ
アを叩いた。返事はすぐに返ってくる。

「どうぞー。開いてます」

「おじゃましてーす」

「こんにちは」

だが、ドアを開けたところには誰もいなかった。玄関から一直線
に続く廊下にも人の気配はない。私とシユナは顔を見合わせて互い
に首を傾げると、失礼かとは思ったがそのまま昨日通されたリビン
グへと向かった。

「メルー？」

声をかけながらその部屋を覗くと、そこには予想外の人物　ア
アイテム屋店主兼学者のフェイルさんの姿が。

「こんにちはウェルトさん、それからシュナイゼルさん」

「2人とも、玄関まで迎えに行けなくてすみません。少々驚かせた
くて」

「いや、驚いたも何も…。何でフェイルさんがココに？」

「それについては後々説明します。あ、シュナは初めてですよね？
彼はこの村でアイテム屋を営んでいるフェイルさんです」

「シュナイゼルです。これからこの村を拠点にしようと考えている
ので、これからフェイルさんのお世話になることも多いと思います。
宜しくお願いします」

「コチラこそ。スクラスハンターに会うのが初めてなので、元ハン
ターとしてとても光栄です。まだ最近営業を始めたばかりで品揃え
もあまり良くはないのですが、アイテムが要り様になりましたら是非
利用してみてください」

「はい、そうします」

こうしてフェイルさんとシュナの自己紹介が済んだところで、全
員がテーブルに腰を下ろした。私はシュナの隣、フェイルさんの向
かいだ。

そしてシュナの向かいに座ったメルが早速とばかりに口を開く。

「今日ここにフェイルさんと呼んだのは他でもない。今日お話しよ
うと思っていた異変について大変興味深い話をお持ちだったので、
2人にも説明していただこうと思ひまして」

「これは最近、モンスターの生態を主に研究している学者仲間の中で囁かれている話です。どこまでが真実かは分かりません。ですが小耳に挟んでおくことで損になることはない、と思ったので」
「お願いします」

シュナが道中私をからかっていた時とは打って変わって真剣な表情になる。この男、通常装備のへらへら笑顔を引っ込ませればそれなりにカッコイイのだ。私はいつもこの顔してりゃ良いのに、と思いつつもフェイルさんの説明に耳を傾けた。

第16話 異変の兆し

フェイルさんの話は所々専門的であつたり所々脱線があつて、その度にシユナが説明を求めたりメルが話を元に戻したりしたのでかなり紆余曲折した。それを簡潔にまとめると以下のような話になる。

これはフェイルさんの学者仲間で、ドンドルマの街に設置されている“古龍観測所”の研究員から聞いた話だそうだ。

ちなみにドンドルマとはシュレイド地方にある街で、立地の関係からかしばしば古龍や巨大な甲殻類などのモンスターの襲撃を受けている。それ故に“古龍観測所”を設け常にモンスターの動静に気を配ったり、街の一部に特殊な迎撃施設を設置したりしている。

その“古龍研究所”で研究されている古龍種だが、どのモンスターも強大であることが大きな特徴とされている。実際Sクラスレベルのハンターでさえ1回のクエストでは討伐しきれず、何度目かの戦闘でようやく倒すことに成功したという話もある程だ。これには古龍自身に、その少ない個体数からか、ある程度傷つくと戦闘から一気に離脱する習性と機動力を持つことが大きな理由として挙げられている。

そのためか、古龍種は未だ研究が十分に進んでおらず、分からない部分が多い。しかしそんな古龍種に最近、顕著な異変が起きていると言つ。

その異変とは、簡潔にまとめしまえば生態の変化、である。これまで“古龍研究所”は昼夜を問わず古龍の動向を追っていた。

そして街を襲う気配はないかと目を血眼にして見張っていたのである。そのため収集された生態データは信用に足る確実性を持っているはずだった。

しかしここ最近、これまでのデータでは絶対にあり得なかった動きが見られるようになったと言う。

例えば、まず獲物、つまりは餌が変わった。これまで肉食であった古龍達であるが、極稀に草食をするものが現れたというのだ。餌の変化は古龍に限らず、あらゆる生物にとって劇的な変化である。餌が変わるということは生態系そのものの変化さえ起こりうる。それが強大な古龍であれば効果は絶大だ。これによりこれまで古龍の餌となっていた小型の飛竜種などが大量発生し、街を襲う被害が想定されている。

またここ数ヶ月、古龍が街近辺に姿を現す頻度が以前に比べて格段に上がったそう。それまでは個体数が少ないことや、街近辺に現れてもハンター達の協力で撃退していたため、1度撃退・討伐されれば暫くは襲撃してこなかった。それが最近になって街への襲撃頻度が高くなり、それに伴った怪我によるハンターの減少や古龍対策用の砲撃玉の大量消費が著しいとのこと。これはドンドルマにとって、経済面でも安全面でも重大な問題となっている。

そして当初、対象が古龍であったが故に「おそらくこれまで発見されていなかった生態が明らかになったただけだろう」と推測されていたこの現象だが、今では他のモンスターにも顕著に現れているのだと言う。

変化の現れ方はモンスターによってまちまちなため、最初はその変化に気付く者（特に学者）は少なかった。だがクエストを終えギルドに帰ってきたハンター達が持ち帰った“ちよつとおかしなモンスターの話”が徐々に集まり、やがてそれはギルドから調査を依頼された学者達の知るところとなる。

こうして正式に護衛をつけての調査に乗り出した各種モンスター

の生態研究専門家達の出した答えは、「原因は何だか分からないがとにかく各種モンスターに一部変化が起きている」というお粗末なものであった。これにギルドやハンター達が満足するはずもない。特にモンスターの攻撃習性の際を突いて攻撃することでより高い生存率を保つハンター達にとって、せめてどのモンスターにどんな変化が起きているのかぐらいは把握しなければ狩りも出来ない。

そこでドンドルマのギルドやハンターを中心として、つい1ヶ月前に発足したのが『特異モンスター調査団』だ。この調査団はその名の通り特異なモンスターについて、実際にそのモンスターを捕獲・追跡することで、その割合や変化点についてまとめているという。

未だ出来たての調査団であるため、知名度も低ければ団員数も少ない。だが着実にその結果は表れており、ドンドルマ近辺のシヨップでは調査団のまとめた冊子はハンターに大人気で即日完売。ギルドも現在調査団とその冊子について、正式認定の作業を急いでいるという。

「それが最近モンスターに起こっている異変、なわけです」
「でもそれが私達の直面している異変と何か関係があるの？」

長い長いフェイルさんの話を聞き終わりそうまとめたメルに私が問い返す。ここで私の言った“直面している異変”とは、異世界からこのモンハンの世界に飛ばされてしまうことを指している。ここ

にはフェイルさんがいたので少しだけ濁してそう表現した。だがメルはシッカリその真意を汲み取ってくれた様で、

「彼もまた、貴女方の事情を知っていますから、大丈夫ですよ」

と笑う。

それに頭を抱えたのは勿論私だけだ（シユナはそもそも現状に対して苦言を呈するということをしない。大抵のことは「へーそうなんだ」良いんじゃない、それで」で終わりである）。この村の人々はいやに異世界だとかトリップだとか、そう言ったファンタジーな事態に対して寛容過ぎる節がないだろうか？

本来ならそんなことを言われた所で到底理解なんかできないし、況してや受け入れることなど程遠い。もし私が現実世界にいる際、似たような話を聞かされたら……、想像に難くない。絶対に信じてないであろう。むしろそんな話しようものなら、ちよっと忙しくて頭がおかしくなったのだらうと思う。

それなのに、それなのに。私達がこの家に着いてからのフェイルさんの様子を見る限り、私達を頭のおかしい人など見なしている感じは受けない。むしろ、昨日までと全く変わっていない。寛容過ぎるというか大雑把過ぎると言うか。もしかや以前似たようなことがあったのではなしか、と疑いたくなる程だ。

「ウェルトさんへの返答になりますが、モンスターへの異変と貴女方の異変には共通点があります」

「共通点、ですか？」

「はい。どちらもドンドルマを中心に起こっているのです。今の話でもしたように、モンスターの異変はまずドンドルマ周辺での古龍

から始まりました」

「そして他の村長を通じて得た私の情報に拠ると、ウェル達のように異世界から来た人が最も多く発見されているのがそのドンドルマなのです」

「ちなみに何人くらい発見されているんですか？」

「ドンドルマで発見された方は全部で24人。内2/3が意識不明か、既に死亡が確認されているかのいずれかです」

「そんなに…」

私の台詞にフェイルさんが「厳しいようですが、これが現実です。特にドンドルマの方は強力なモンスターが多いですから」と真剣な表情で付け足す。

私もゲームの中で、だが1度だけ古龍種と戦ったことがある。勿論それはダイやシュナに連れて行ってもらっただけで、実際には攻撃ではなく笛を吹いているのが主な仕事だった。だがそれだけでも古龍種の強さは痛い程分かったし、もしコチラの世界に来てすぐそんなモンスターに鉢合わせたら勝つ術もないことは理解出来る。

だがそれにしても、16人もの人が意識不明か既に……。それがもしかしたら自分や、シュナやダイなどの大事な友人達だっただらと思うと身が震えた。

「ドンドルマのギルドでは既に異世界人の保護に対する対策も立て始めているようです」

「それはドンドルマだけで？」

「当初はそのつもりだったようですが、異世界人が他の地域でも発見されていることを知って、他のギルドとの連携も図ろうとしているようです」

「そして各地方のギルドで有志を集って、原因の究明に努めるらし

いす。さっきの話を教えてくれた研究員の息子がドンドルマのギルドに所属しているハンターなのですが、その息子伝いに得た情報ですので確実性は高いと思いますよ」

「その有志の募集というのはいつ頃？」

「この村に来るのは早くてあと2・3日、遅ければあと一週間後でしょうね。一旦中央ギルドで話し合いなどが行われるでしょうから」

「それは誰でも参加出来るの？私みたいな新米ハンターでも？」

「有志の募集に制限があるかどうかまでは……。ただし気絶した人間を安全な場所まで運ぶのは危険な仕事ですし、場合によっては強靱なモンスターの潜む場所へ足を踏み入れたりしなければなりません。ですからある程度の制限は予想されます」

フェイルさんの説明は理解出来る。だが私は肩を落とさずにはいられなかった。自分が弱いのは十分理解しているが、それでも誰かの役に立ちたかった。少しでも良い状態で飛ばされた仲間を保護する手伝いをしたかった。それが出来ないことがこんなにも口惜しいなんて。

私は膝の上の握り拳を強く握り締めた。だが顔は下げない。今は表情に出さない様にするだけで精一杯。表情に出して皆を困らせるわけにはいかないから。

だが隣に座っていたシユナが、それまでの真剣な表情から一転、いつもの標準装備〃へにやへにや笑顔で助け舟を出してくれた。

「確かに仕事自体には制限があるかもしれないね。さっきフェイルさんが言った通り、仕事自体はとても危険みたいだから。でもウエルにも出来る仕事、あるんじゃないかな？」

「あ、それなら中継役が良いと思いますよ？」

「メル、中継役って何？」

「中継役と言うのは、簡単に言ってしまうえば連絡係です。これもさつきの息子さん経由の情報ですが、ドンドルマのギルドはこの事業を極秘扱いにしたいようです。まあ、異世界から云々なんて話普通は理解出来ませんしね」

「そりゃそうよ！メルもフェイルさんもおかしいもん！！」

「せめて理解があると言つて下さいな……。まあともかく、この事業の話を各ギルドの受付嬢に不用意に聞かせるわけにもいきませんか、連絡役が必要になると思います。それをウエルがしては如何ですか？」

「うん、それなら出来そう！」

「良かったね、ウエル」

横に座るシユナに私は素直に笑顔で頷いてみせる。それを見たメルは更に何かを思い付いたのか、「それなら」と続ける。

「ウエルさんも時間のある時に集会所の手伝いをしてみませんか？実は今集会所が人手不足で大変だ、とタルクが煩いんですよ」

「そう言えば、前タルクさんやティータに挨拶に行った時も2人しかいなかったや」

「ええ。給料も出ますし、訓練やクエストのない時だけでも構いません。中継役を引き受ける上で必要になつてくることも学べるし、とても良い経験になると思いますよ？どうしますか？」

「それならやってみようかな！」

「良かった。タルクには私から話しておきます」

メルは私の快い返事に気を良くしたのか、「すぐに必要な書類を取ってきます」と席を離れる。メルが完全に部屋から離れたのを見

計らって、フェイルさんがコッソリ付け足した。

「最近メルヴィス君はタルクさんにずっと怒られてばかりだったんですよ。『もつとギルドにも人をまわしてくれ！』ってね」

「だからウエルの返事であんなに機嫌が良くなっただんですね」

「そう、もう怒られるのは懲り懲りだって最近のボヤキはそればかりだったからね」

どこかしらちょっと情けない村長である。愛嬌があると言っのかもしれないが、個人的には“ヘタレ”という称号が似合う気がする。まあ、本人には言ってあげないけどね。

だがそんなことは露も知らず、メルはにこにこ顔で私に書類を渡す。私がそれを受け取ると、「じゃあそろそろ帰ろうか」とシユナが腰を上げた。時計を見るともうお昼。昼食の時間だ。

「それじゃあウエル、タルクによろしく」

「はいはい。じゃあね、メル、フェイルさん」

「はい、また」

こうして長い長い午前が終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296f/>

cry from U.

2010年10月19日14時35分発行